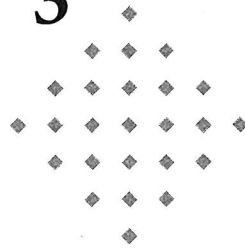

第3章



不登校に関する文献研究

不登校に関して事例研究を中心に非常に数多くの論文著書が発表されてきている。しかし、あまりにも多くの論文著書があるためか、先行研究を批判検討した文献研究はほとんどない。そこでこの章では、現代の日本においてカウンセラーや教師が不登校問題に取り組むにあたってその実践に役立つという視点から、不登校に関する初期の研究論文を主な対象に検討し、文献を整理したい。

研究の概観

不登校に関係する初期の論文として、まずドイツ語圏のユング (Jung, C. G. · 1913)、メラニー・クライン (Klein, M. · 1923a) の精神分析による事例研究があげられる。次いでアメリカのトレイナー (Treynor, J.V. · 1929) が、子どもの心身症状に関して学校の問題点を指摘している。⁽¹⁾⁻⁽³⁾

学校に来ないのはその子どもが怠惰なためであり、反社会的行動をしがちであると考えられていた時代に、不登校の問題に焦点をあてたのが、アメリカのブロードウィン (Broadwin, I.T. · 1932) であり、イギリスのパートリッジ (Partridge, J.M. · 1939) である。ブロードウィンは、無断欠席 (怠学・truancy) の変形として、強迫 (obsessional) タイプの神経症あるいは神経症的性格の者がいると主張し、9歳の少女と13歳の少年の事例を取り上げている。パートリッジも、50例の無断欠席のうち10例が精神神経症的なタイプであるとし、ブロードウィンの事例との類似性を指摘している。⁽⁴⁾⁽⁵⁾

アメリカのジョンソンら (Johnson, A.M., et al. · 1941) は、このように無断欠席とは別の神経症的な一群に対し、‘school phobia (学校恐怖症)’ の用語を提唱した。しかし彼女らは、後に、家族の力動が最も重要であるという立場から、‘school phobia’ の代わりに、‘separation anxiety (分離不安)’ を用いるようになった (エステスら・Estes, H.R., et al. · 1956)。⁽⁶⁾⁽⁷⁾

アメリカのイマニュエル・クライン (Klein, E. · 1945) は、ブロードウィンやジョンソンらの考えを踏まえながらも、学校の問題や対応などについて述べている。そして、‘reluctance to go to school (学校嫌い、登校を嫌がること)’ という用語を用いるとともに、‘refusal to go to school (登校拒否)’

‘anxiety about school (学校不安)’ という表現も用いている。⁽⁸⁾

1950年代以降、多くの論文が発表されるようになった。上記の用語の他に、‘school refusal (登校拒否・学校拒否)’ (カーン・Kahn,J.H.・1958)、‘non-attendance at school (不登校)’ (ハーゾフ・Hersov,L.・1960) などがイギリスで用いられ、今では広く使用されている。現在でも用語は統一されておらず、佐藤正道 (1992a・1996) によると、Psychological Abstracts のキーワードとして、‘school phobia’ と ‘school refusal’ などが用いられており、前者は、1969年から増減はあるものの、平均すると年に10件以上の論文があったのが、1994年は1件、1995年は3件と減少してきている。後者は1969年から1983年まで毎年数件であったのが、1984年から毎年10件前後の論文がある。‘non-attendance at school’ はキーワードの用語になっていない。⁽⁹⁾⁻⁽¹¹⁾

日本の初期の研究論文として、高木隆郎ら (1959) が「長欠児 (long absentees from obligation of school attendance)」、佐藤修策 (1959) が「登校拒否 (refusal to attend school)」、鷺見たえ子ら (1960) が「学校恐怖症 (school phobia)」という用語を使用しそれぞれ不登校について論じており、それ以降、数多くの論文著書が発表されてきている。鑑幹八郎 (1989) は、日本の不登校研究の歴史を、「学校恐怖症」の研究の時代 (1959年から)、「登校拒否」の研究の時代 (1970年以降)、「不登校」の用語が使用されるようになった時代 (1980年ころから) の3期に分けている。そして、1992年 (平成4年) 3月に文部省の学校不適応対策調査研究協力者会議が、登校拒否を特定の性格傾向をもつ子どもに起こるとした従来の見解から、「登校拒否はどの子どもにも起こりうるものである」との立場に転換した報告書を提出して以来、「登校拒否」よりも、学校へ行けないあるいは行かない状態を広く指す「不登校」のほうがよく使われるようになってきたように思われる。なお、文献のうえで「不登校」という言葉を最初に用いたのは、辻悟や清水将之 (1969) と思われる。⁽¹²⁾⁻⁽¹⁷⁾

最近では、ハーゾフ (1990)、佐藤正道 (1992a・1992b)、稲村博 (1994) が、世界の不登校研究を展望した労作を発表している。⁽¹⁸⁾⁻⁽²⁰⁾

再度ここでは、最も初期の論文であるユングとメラニー・クラインとトレイナーを取り上げ、次に実質的に不登校研究の出発点と言えるブロードウィン、そしてそれに関連してイギリスのボウルビイ (Bowlby,J.)、および学校の対応について述べているイマニュエル・クライン、さらに佐藤修策を中心に日本の初期の論文を取り上げることにする。

初期研究

ユング自身、12歳のとき、発作を伴った神経症のため半年以上もの間、学校を休んでいる (ユング・1961)⁽²¹⁾。これは、まさに現在で言う「不登校」である (河合隼雄・1978、参照)⁽²²⁾。このような経験をもつユングは、1913年に、吐き気や頭痛のために学校を早退したり学校に行くのを時々拒んだ11歳の少女の事例を報告している。ユングの助手の女性が、少女と精神分析的面接を10回行っている。そして、ユングは童話の赤頭巾や神話などを援用し、この少女の父親に対する近親相姦のファンタジーについて論じている。⁽²³⁾ ユングは1907年にフロイト (Freud,S.) と知り合い、1913年に離反しているが、この論文はもともと1911年にある学会において発表されたもので⁽²⁴⁾、このとき彼は国際精神分析学会の会長であり、この論文の内容はフロイトの精神分析学の考えの枠内にまだあるように思われる。

ところで、ユングの分析心理学の考えにもとづいて、河合 (1967a・1967b・1974) は学校恐怖症の中学校2年生の男子と18歳の男性の事例研究を行い、「肉の渦」の夢に象徴されるグレート・マザーの二面性や夢分析などについて論じている。⁽²⁵⁾

メラニー・クラインは1923年の論文の中で、学校嫌い⁽²⁶⁾で学校に行けない6歳の少年と、学校嫌いの13歳の少年に対して精神分析を行っている⁽²⁷⁾。しかし、彼女の分析は様々なことをあまりに性的な意味に還元しすぎているように筆者には思える。なお、クラインは子どもの発達における教師の役割として、生徒を共感的に理解すること (verständnissvolle Einfühlung) の大切さを指摘している⁽²⁸⁾。

トレイナーは1929年に、「Schoolsickness (学校病)」という言葉を作り

出し、次のように述べている。〈これは神経質なことが特徴で、不安、落ち着きのなさ、短気、興奮状態を示す。そして、食欲不振や睡眠不足におちいり、さらに学校を欠席するという考えが浮かんでくる。試験や運動会、授業参観のようなものが近づくとも悪化し、休みになると改善する。このような子どもの病気の要因は学校にある。学校の競争システムは子どもたちにプレッシャーをかけている。子どもたちは失敗に対する恐怖心や競争的な態度ゆえ常に緊張している。そして、家庭が子どもの学校での体験を完全に和らげないと、schoolsickness になる。このような子どもは、エネルギーを使い果たしている (energy bankrupt)。学校の改善策として、競争や管理を減らし、自発性を尊重しなければならない。親と教師の協力も大事である。そして、健康で熱心で何より共感的 (sympathetic) な教師が必要である〉⁽²⁹⁾。トレーナーは、不登校について直接取り上げているわけではないが、子どもの心身症状に関して学校の競争システムを問題にし、その改善策について述べており、これらは現在でも傾聴に値する。また、家庭の役割として学校での緊張を和らげることについて言及していることも注目される。

ブロードウィンの研究

ブロードウィンは1932年に、次のように述べている。〈その少年は学校にいるとき、母親の身に何か恐ろしいことが起きている、例えば家が火事で母親が焼かれているという考えが浮かんで来ては消えず、家に帰らねばならなかった。少年が安心するのは、母親が目の前にいるときだけである。このことは、母親に対する強い幼児のような愛着 (love attachment) と、母親に対する激しいサディスティックな敵意のある態度を示している。教師は、母親の代理として、子どもの母親に対する愛憎の葛藤を向けられるのであり、教師自身に重大な落ち度はない。このような無断欠席に対し、子どもの無意識の心的生活、つまり愛と憎しみの本能の展開について取り扱うことが、最も効果的な接近法である。……子どもの基本的な追求 (strivings) は、母親への激しい愛着によって方向づけられる。幼児期の、

養い保護してくれる母親のもとに戻りたいという欲求がある。この種の幼児期の要求を伴った愛着が、児童期になって現れることは問題である。母親に対するこれらの要求が、幼い適切なときに現れたのに、十分扱われてこなかったから、いまだに残っているのである。つまり、幼いときの要求が不当に否認されていたのである。あるいは、親の性格ゆえに、子どもの愛着表現が幼児のときの形のままで大目に見たり、子どもが自立しようとする試みを妨げるような子どもへの過度なかわりによって、この種の愛着が残ったままでも許されていたのである〉⁽³⁰⁾。

ハーゾフ (1990) は、ブロードウィンの研究が「学校への見かけの恐怖が本当は家を離れることの恐怖である」という考えの基礎となったと述べており、ブロードウィンと上記のユングやクラインとの関連を指摘している⁽³¹⁾。このように、ブロードウィンの功績は無断欠席のなかに神経症的不登校を見出した点にあるが、その後一般に、不登校児は神経症あるいは神経症的性格であり、不登校の原因はその子どもや家族に問題があるから、というとらえ方をされてしまった。

また、ブロードウィンの論文で注目されるのは、母子分離不安や過剰依存について、親の過保護や甘やかしすぎのせいと決めつけず、愛着 (love attachment) の観点からも考察している点である。つまり、幼児期に愛着要求に適切に応えなかったり、自立を促すようにしなかったから、児童期になって母親に対する強い幼児のような愛着と敵意のある態度を示す、と彼は考えている。これは、ボウルビイの愛着 (attachment) についての考えと同じである。

ボウルビイの研究

「アタッチメント」という言葉に心理学的に重要な意味を内包させたのはボウルビイである。前章で取り上げたように、ボウルビイ (1979) は親の役割として、子どものアタッチメント行動に応え安心基地を供給することと、基地から探索に出かけるように励ますことの2つをあげている⁽³²⁾。

さらにボウルビイ (1973) は、「愛着人物に近づいて、自分に応答しても

らえるという点で自信がなく、愛着人物の有効性をできるだけ確実にするために、愛着人物に非常に接近し続ける」こと、つまり愛着対象の有効性に対して不安であるがゆえ過剰に依存することを、「不安性愛着 (anxious attachment) あるいは不安定性愛着 (insecure attachment)」と呼んでいる⁽³³⁾。そして、この観点から登校拒否 (school refusal) について幅広く文献にあたり、考察している。

ボウルビイも、「子どもが怖がっているのは、学校で起こることではなくて、家を離れることである」と考えており、登校拒否児の家族の相互関係を4つのパターンに分類している。そして、〈第1に、家族のパターンが確認されると、子どもの行動は容易に理解できる。第2に、このような子どもに対して臨床家がこれまでにとってきた判断の多くは、子どもたちは甘やかされすぎてだめになっているというようなもので、これらは不適切であり、間違っている〉と結論を下している。また、ブロードウィンやクラインたちに対して、〈母親の身に何か恐ろしいことが起こっているかもしれないという子どもの考えが、無意識のうちの母親への憎しみの作用かどうかは、事例ごとに調べるべき問題であり、子どもの現実の経験から理解できる場合が多い〉と、母親への敵意や憎しみという解釈を批判している。⁽³⁴⁾

ボウルビイは、登校拒否だけでなく様々な恐怖症の事例をもとに、「愛着対象による受容や応答が不確実であると、不安定で不安の強いパーソナリティを形成する……愛着対象による受容や支持に対する漠然とした自信が、安定した自立心 (self-reliance) のあるパーソナリティを形成する基礎である」と述べている。そして、彼が考えている心理療法は、特に子どもに対する心理療法は、できるだけアタッチメントの欲求や安心基地への欲求を満たすことによって、「安定性愛着 (安心な愛着・secure attachment)」を得させ、それから自立を促す、とまとめられるであろう。ボウルビイは、自身の理論的立場が「発達に対して環境の影響を実質的に重視する精神分析家と非常に共通している」と述べ、フェアバーン (Fairbairn, W.R.D.)、ウイニコット (Winnicott, D.W.)、マラー (Mahler, M.S.) たちの名前をあげて

いる。⁽³⁵⁾

このボウルビイの不登校の研究は、家族関係を検討し整理している点に意義があるが、ブロードウィンや他の多くの研究者と同様、学校の要因などを取り上げず、子どもとその家族だけを論じている点が問題である。そして、不登校の原因を理解することに力点がおかれ、実際どのように対応していけばよいのか十分に論じられていない点も問題である。

ところで、前章で述べたように平井信義は「アタッチメント」と同等の概念である「スキンシップ」という概念を中心に母子関係を研究しているが、不登校についても臨床活動を行っており、彼の不登校の一連の研究をまとめると次のようになる。〈登校拒否児は自主性の発達に問題があり、乳幼児期の探索行動であるいたずらや、幼児期の第一反抗期を経験していないことが多い。……母親との間で、おんぶ、だっこ、添い寝を通しての情緒的関係が希薄であった。母子間の情緒的関係の緊密化が自主性の発達の基盤である。……登校拒否児に対して一切の干渉を止め、子どもにまかせ、自主性を辛抱強く育てる。さらに養育が溺愛の場合、子どもは物質的金銭的欲望が強く、それを統制する能力が不足しているので、親が小遣いの金額を決めるなど制限を加える〉(平井・1968、平井・1975、平井・1978、上床和歌子ら・1977、池田晃子ら・1983)。これはボウルビイの考えと共通しており、さらに臨床経験をもとに具体的な対応についても述べている。⁽³⁶⁾

また、松尾恒子 (1976) は小学校1年生の女子の登校拒否の事例研究において、〈甘やかされることと「甘え」の感情が満たされることは、別の事象ではないか。「甘え」が必要な時期に満たされていたのか、「甘え」を満たすような治療的関与をどのようにしたらよいか〉と述べている⁽³⁷⁾。

イマニュエル・クラインの研究

イマニュエル・クラインは1945年に、〈登校拒否は不安・攻撃性・二次的疾利得の3つの構成要因に分けられる。不安であることが教室内の行動や学習の機能障害および登校拒否と関係するが、欠席が慢性的になると攻撃性や二次的疾利得が顕著になり、不安は相変わらずあるのに教師も

生徒も不安に気づかなくなる。欠席が急性の場合は、不安が主要な動機である」と述べている。

彼は精神分析の考えにもとづき親子関係を問題にしているが、学校や居住地域などの問題も指摘し、「学校に対する不安」として「教師を恐れること・他の生徒を恐れること・失敗を予期して学校の勉強を恐れること」をあげている。そして教師を恐れる例として、〈答案をほとんど書けなかった9歳の少女に対し、担任の教師が怠けていると思い、立たせて叱ったり嘲笑ったりした。このようなことがあって、少女は学校に行けなくなった〉と事例のなかで述べている。また、〈学校の授業や宿題における失敗の恐怖は、どの登校の困難な子どもにも多かれ少なかれあるが、特に青年期の急性の場合しばしば中心的な問題である〉と述べている。

〈急性期には短期 (brief) 精神療法を行い、神経症が基底にある場合は長期の精神療法を行う〉など、基本は精神分析的治療をクラインは考えているが、学校等の具体的対応についても述べており、例えば次のようなことをあげている。〈担任の教師が変わる。児童相談所の調査員か家庭教師が家庭訪問し子どもとすごす。家で友だちと遊んですごす。学校に行っても無理して教室に入らなくてよく、いつ帰ってもよい。校長室や職員室にいて、もしその子どもが望むなら他の子どもとともに体育やダンスなどに参加してよい。校舎に入れないときは、時折調査員が学校まで一緒に行く。事務職員の手伝いや、本を読んだり絵を描いたりしてよい。ほんの少しでも学校に居れるなら、親が学校まで一緒に行く〉。

「子どもが耐えられる範囲においてどのような学校との関わり (school participation) でもよいから、できるだけ早いときに学校へ復帰させることが非常に重要である」と述べているように、クラインの論文で注目されるのは学校との連携と初期段階での取り組みの重要性を指摘している点である。しかし、「親と教師が厳しく子どもを学校へ戻そうとすると、子どもの恐怖は一層増し精神療法は長引く」とも述べており、子どもが耐えられる範囲をどのように見極めるのかは、実際のところ難しい。また、できるだけ早く登校させようとして行動面だけに目を奪われると、子どものスト

レスを軽減することや子どもの問題の背景に目を向けることがおろそかになる危険性がある。

なお、クラインは「引きこもり (withdrawal) が著しくなり、しばしば精神分裂病と誤診される」とも述べている。⁽³⁸⁾

日本の初期研究(1)

高木らは1959年に、京都市内の小中学校における長欠児についての実態調査の結果を報告している。彼らは、長欠児のなかに〈学期分裂病や学校恐怖 (分離不安・登校拒否) の症例〉を見出し、〈長休みをした後に久方振り登校・出勤するときの、とりこし苦労や恥ずかしさの感情を「長欠感情」と呼び、学校恐怖の直接の動機原因が除去されても登校することのできなくなった新段階を特徴づける〉と述べている。そして、〈長欠児一般について、比較的低知能、比較的貧困家庭、崩壊家庭、学級内孤立化傾向の4条件がその背景にある〉としている。ところで、この後、高木ら(1965) および高木(1984) は、この実態調査において分裂病と診断した症例のなかに、〈一時深刻な自閉状態を呈したが、その後分裂病は誤診であった、とわかる経験をした〉と述べている。⁽³⁹⁾

佐藤修策は1959年に、日本の不登校研究の出発点といえる論文を発表している。〈経済的にも心理的にも恵まれており知的水準も平均以上である、小学校3年生～5年生の5名の登校拒否児のケース分析により、神経症的登校拒否〉について、彼は次のように述べている。

〈登校拒否児行動の根底には児童のパーソナリティの問題が存している。発病前の性格特性として、内向性、感情と社会性の未熟、鋭敏な感受性などがあげられる。宿題を全部することに強迫的態度を示し、できないときは学校を休む子どももいる。学級委員に選出されている者が多く、「本当にいい子」と理解されていた。しかし「いい子」とは、教師にとっては「成績のいい、おとなしく、すなおな子供」であり、友人にとっては「悪いことをせず、いつもニコニコと友人に従う」ということであった。消極的、受動的友人関係と言える。リーダーとしての性格特性は持たず、委員

であることが圧力として働く傾向にある)。宿題に対しての態度や「いい子」についての論考など、ひとつの典型的な臨床像を描き出している。

〈親子関係は親の側では過保護ないし溺愛、子供の側では過度の依存性となる。特に、母子関係は多く服従的溺愛、祖母孫関係は支配的溺愛を特性としている。一般にわが国においては「おばあさん子」なる特殊の人間関係がある〉と、親子関係については従来の研究者と基本的に同じ考えであるが、祖母と母(父)と子どもの関係について言及している点は注目される。

そして、佐藤が整理した治療の方法論と治療の経過は、現在も意義があると考えられるので、少し長いが次に要約する。〈小学生の神経症的登校拒否児の治療は、まず対処療法的努力、できるだけ早く登校するよう努力することに重点がおかれる。ついで根本治療的努力、クライアントのパーソナリティと親子関係の治療である。……登校再開のための準備的努力として、次の事柄が十分行われる必要がある。①親とクライアントの不安、緊張を和らげる。具体的には親や教師に登校拒否の原因について理解を求め、登校への一切の努力——強圧的なものも、説得的なものも放棄する。家庭学習を課することはよくない。転校や転級は根本的解決にはならない。困惑、動揺し、登校しか求めている親をどのようにして受容し、ラポールを形成し、治療的關係を結ぶか困難な仕事である。②親子関係、特に母(又は祖母)との関係を改変するよう努める。③教師との関係を作る。教師が家庭訪問し登校させようと熱心になると、かえって治療の障害になる。しかし、教師が生徒と接触しないと、生徒は教師に拒否されたと感じる。人間関係の質が問題である。④クライアントの不安を和らげるように努力する。クライアント自らが自己決定を行なうようにする。……以上4種の努力がなされたとき、クライアントに明朗性、安定性、積極性のきざしが現われる。親の態度に異常に敏感に反応していたのが弱化する。ついで友人関係の再開、自発的学習等がみられる。そして兄弟や友人に学校のことを自発的に話しかけるなど、「登校への心の動き」がおこる。かくて、登校再開の機がクライアントの内部に自発的に熟して来たと言える。これを

「心理的登校志向」と呼び、重視したい。この志向があつて登校が開始される。しかし長期の登校拒否の場合には、これのみで登校を開始することはむずかしく、親または近親者による学校への連行など、外部からの強い刺激づけが必要である。この志向に裏づけられていない刺激づけは、クライアントの頑強な抵抗にあうか、症状を悪化させるかである。……クライアントが登校を開始し、ここに治療が本格的に開始される。まず第一に、登校開始が治療の終末ではなく、スタートであることを親に十分認識させる。治療を続けていないと以前の拒否よりは重症の形をとって再発する。治療は望ましくない親子関係を断ち切ることに焦点があるのではなく、違った新しい親子関係を経験するよう援助することを意味し、ロジャーズ(Rogers,C.R.)、アクスライン(Axline,U.M.)の立場に通ずる。ときとして、治療経過中に親がおちいる罪業感、治療者の価値評価的態度に発していることが多い。クライアントの治療は、自立(独立)への要求を自己認識し、自立への能力への自信を回復するよう援助することである。クライアントへの遊戯療法はアクスラインに主としてよって来た)⁽⁴⁰⁾(ロジャーズ・1942・1957、アクスライン・1947、参照)⁽⁴¹⁾⁽⁴²⁾。

「できるだけ早く登校するよう努力する」ために、まず「登校への一切の努力——強圧的なものも、説得的なものも放棄する」という逆説は、重要な指摘である。前章で筆者が述べたように、依存と自立のサイクルののっとり、まず自立のためのエネルギーを補給する必要がある、「親とクライアントの不安、緊張を和らげること」から始めるのは当然のことである。

日本の初期研究(2)

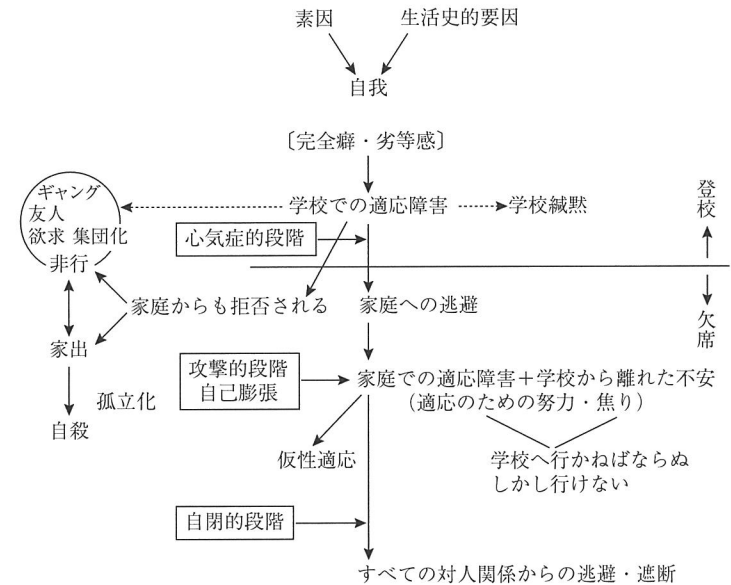
鷺見らは1960年に、学校恐怖症(登校拒否)の小学校1年生～高等学校3年生の13名の事例を検討し3群に分け、次のように述べている。〈第I群(小学校1年生～2年生・3名)は、学校へ行かない理由として教師や友人に関することを訴えているが、親子間に相互依存と相互に別れることへの不安がある。第II群(小学校3年生～6年生・6名)は、すぐ下の弟妹に

対するしつとがあり、母親に対しかなり依存的であると同時に信頼することが出来ない様子が認められた。第Ⅲ群（中学校3年生～高等学校3年生・4名）は、親の期待を自らのものとして取り入れ適応していた「いい子」が、自らの理想像に合致しない自己を発見し自信喪失に至り、逃避する方向をとる。各年齢群の学校恐怖症の問題のあらわれ方の相違は、その年齢段階における性格の発達が反映していると考えられよう。また、イマニュエル・クラインに対し、「Klein がいうように、学校に帰ることが遅ければ二次的な各種の問題が発生するから、早ければ早いほどよいという意見は、軽い例に対しては妥当であるかもしれない。……しかし、重い例に対してはかかる操作は不可能であろう」と述べている。⁽⁴³⁾

従来の研究のほとんどが小学生と中学生を主な対象にしていたのに、鷲見らの論文は高校生を3例含んでいることにまず意義がある。そして、不登校の問題に対し年齢段階における性格の発達という視点の重要性を明確にしていることも注目される。しかし、鷲見らの描く臨床像はひとつの典型として説得力はあるが、彼女らがくある群にのべた特徴が必ずしも適用されない例を最近経験した」と述べているように、事例数が少なく、各年齢群の学校恐怖症の特徴として一般化し結論を下すには無理がある。

鐘（1962・1963）は、学校恐怖症の20例（4歳～14歳）を検討し、〈①単純な反応性の段階（幼稚園～小学低学年）、②合理化、理由づけの段階（小学校期）、③強迫不安の段階（小学校中学年～中学校期）、④高度の合理化、理由づけの段階（中学校期以上）、の4段階を見出し、精神発達による人格構造の差異に対応している〉と述べている⁽⁴⁴⁾。不登校を精神発達によって類型化している点が注目される。

高木（1962）は、学校恐怖症（心因性登校拒否）の経過を症状に従って、「Ⅰ．心気症的時期、Ⅱ．攻撃的時期、Ⅲ．自閉的時期」の3期に分けている。そして、〈児童後半以降のものが school phobia として特徴的であって、年少児のいわゆる幼稚園恐怖と区別し、児童後半以降では母との分離不安は多くの場合2次症状——結果であって原因ではない〉と述べている。また、家庭の問題とともに学校の問題も原因として重要であると指摘して



図Ⅲ-1 学校恐怖症の成立の図式（高木・他・1965）

おり、これについては鐘も同様の指摘をしている。⁽⁴⁵⁾⁽⁴⁶⁾

さらに、高木ら（1965）はこれらの考えを敷衍し発展させ、非行や緘黙症とも対比しその典型像の成立経過を図式化し（図Ⅲ-1）、第Ⅱ期の攻撃的時期は、学校恐怖症の諸症状がはなやかに出揃い、不安や強迫体験がもっとも激しく overt になる」と述べている⁽⁴⁷⁾。

この成立の図式は非常によく整理されたものであるが、不登校児に対し実際どのように対応していけばよいのか、またどのような経過をたどり回復に向っていくのかについては、この当時まだ十分には論じられていなかった。その後、例えば平井（1978）は、〈登校拒否の始まり・登校拒否が始まって数か月の間・暴力の時期・怠惰な時期・閉じこもる時期・回復期・登校を開始する時期〉というように経過を示し、「自主性の発達を促す」という観点から、登校拒否への取り組みについて具体的に論じている⁽⁴⁸⁾。

日本の初期研究(3)

その他、日本の初期研究において、山本由子(1964)と村山正治(1964)の研究が注目される。

山本は学校恐怖症の30例(6歳~15歳)を検討し、「従来から強調されている過保護的養育態度よりも“受け入れる態度の乏しさ”をより本質的な登校拒否の成立条件として重視したい」と述べ、「乳幼児期の子供に対して、抱きしめる、頬ずりをするといった身体接触による愛情表現を殆んどしていない」と指摘している。また、高木の「自閉的時期」を認めながらも、く精神分裂病性の自閉と区別し「退避的生活態度」と呼ぶことゝを提唱している。⁽⁴⁹⁾

村山は登校拒否の中学生4名に対する心理療法の経験をもとに、治療過程、治療者の態度、および訪問面接などについて次のように述べている。く治療過程は、治療関係をもつのを拒否するような段階から積極的に治療関係に参加し、自分自身を表現するようになる。そして行動が自主的になる。こうした治療過程は、非行問題や進学問題で来談する中学生のクライアントと同じような過程をたどるように思われる。……治療関係における治療者の態度が重要である。自然な、自発的な、積極的に相手(クライアント)とかかわりを持つとする態度が効果的であるらしい。私の中に、相手に対する関心というか、好意というか、相手と一緒に過ごすことに魅力とでもよびたいような気持ちがおこってくる。そうすると、そのままの相手を認められるような気持ちになる。治療とは、Rogers,C.R. のいうように前進する力が芽ばえて、培われてくるのを相手とともに待つことである。……登校拒否症状そのものをあまり重要視する必要はなく、むしろ、どれだけ自分自身に対して自信を失っているかが重要ではないだろうか。治療過程の基本的方向は、自分自身に対する信頼の回復にある。……来談しない相手に訪問面接で治療関係をつくりあげることが可能である。直接本人に対し、定期的に来訪し話し合いたいという面接者の気持ちを明確に伝え、そして会いたくなければ外出しても部屋から出てもよいが面接者は45分程ここにいたいと言う。訪問の曜日と時間などを相談して決める。実

際、はじめまずクライアントの傍に一緒に居ることに努力した。また、時間をきめて訪問したことは治療者にもクライアントにも役立った⁽⁵⁰⁾。

村山の研究は、ロジャーズの来談者中心療法の立場から面接の難しい中学生を対象としている点、そして訪問面接を実践し論じている点に意義がある。イマニュエル・クラインが家庭訪問についてすでに触れているが⁽⁵¹⁾、村山のは訪問面接について論考した初めての論文ではないかと考えられる。さらに面接場面が、特に沈黙が続くクライアントに対する面接場面が、生き生きと描写されている。

ところで、ロジャーズ(1958)は次のように述べている。くサイコセラピーによるパースナリティの変化を促進するための条件を一語で言い表すと、クライアントが自分は十分に受け入れられていると経験すること(the client experiences himself as being fully received)だと思われる。この言葉の中には、共感的に理解されているという概念や受容という概念が(the concept of being understood, empathically, and the concept of acceptance)が含まれている⁽⁵²⁾。この‘received’は、ボウルビイの‘secure attachment’と同等の概念であると考えられる。

なお、学校の教師が不登校児の家庭に訪問面接することについては、東山紘久・薮添隆一(1992)が事例をあげて論じている⁽⁵³⁾。

[要旨]

この章では、不登校に関する主に初期の研究論文を検討した。

取り上げたのは、ユング(1913)、メラニー・クライン(1923)、トレイナー(1929)、そしてブロードウィン(1932)、ボウルビイ(1973)、およびイマニュエル・クライン(1945)、さらに佐藤(1959)、高木ら(1959・1965)、村山(1964)、その他の論文である。

ユング、メラニー・クライン、ブロードウィンは、不登校児の事例研究を行い、その子どもや家族の神経症(的性格)について論じている。また、ブロードウィンの論文で注目されるのは、愛着の観点からも考察している点である。ボウルビイの思い描いている子どもに対する心理療法は、でき

るだけアタッチメントの欲求を満たすことによって安定性愛着を得させ、それから自立を促す、と言える。 트레이ナー、イマニユエル・クラインは学校の問題についても述べている。

佐藤は登校拒否の小学生、村山は登校拒否の中学生との臨床経験をもとに、治療の方法論や経過を述べている。高木は学校での適応障害として、学校恐怖症・緘黙症・非行の成立経過を図式化している。

注

- 1 Jung,C.G. (1913/1961) 'A Case of Neurosis in a Child.' pp.204-226.
- 2 Klein,M. (1923a) 'Die Rolle der Shule in der Libidinosen Entwicklung des Kindes.' S.323-344. この論文は、Klein (1975) "*The Writings of Melanie Klein, Vol. I.*" に所収。Klein (1975) pp.59-76. クラインは、1882年にウィーンに生まれ、ブタペスト、ベルリンで精神分析を行い、1925年にロンドンに移住している。
- 3 Treynor,J.V. (1929) 'Schoolsickness.' pp.451-453.
- 4 Broadwin,I.T. (1932) 'A Contribution to the Study of Truancy.' pp.253-259.
- 5 Partridge,J.M. (1939) 'Truancy.' pp.45-81.
- 6 Johnson,A.M.,et al. (1941) 'School Phobia.' pp.702-711. 「この症候群は、しばしば "school phobia" として言及されており、学校にいることと関連した激しい恐怖によって認識できる (p.702.)」とジョンソンらは述べていることから、彼女らが、'school phobia' という用語を創り出したというわけではない。
- 7 Estes,H.R.,et al. (1956) 'Separation Anxiety.' pp.682-695.
- 8 Klein,E. (1945) 'The Reluctance to Go to School.' pp.263-279.
- 9 Kahn,J.H. (1958) 'School Refusal.' pp.337-340.
なお、稲村博 (1994) は『不登校の研究』において、「school refusal」という用語に関して、「クーパー (Cooper,M.G.,1960)」と記しているが、1966年が正しい。稲村 (1994) p.1,p.509.
- 10 Hersov,L. (1960) 'Persistent Non-Attendance at School.' pp.130-136.
- 11 佐藤正道 (1992a) 「世界の不登校研究の展望」 pp.24-32, 資料編pp.1-8.
佐藤正道 (1996) 「1995年の世界の不登校研究の概観」 pp.154-156.
- 12 高木隆郎・他 (1959) 「長欠児の精神医学的実態調査」 pp.403-409.
- 13 佐藤修策 (1959) 「神経症的登校拒否行動の研究」 pp.1-15.
- 14 鷺見たえ子・他 (1960) 「学校恐怖症の研究」 pp.27-56.
- 15 鑓幹八郎 (1989) 「登校拒否と不登校」 p.261.

- 16 文部省 (1992) 「登校拒否 (不登校) 問題について」 (最終報告書) 内外教育, 4315号. p.11. なお、この会議の主査は、坂本昇一である。
- 17 辻悟・清水将之・他 (1969) 「思春期心性とその病理」 p.132, pp.141-144, p.156.
なお、清水は、「高校不登校」を、「Reject to go to High School」としており、ハーゾフ (1960) の 'Non-Attendance at School' と関係はない。
- 18 Hersov,L. (1990) 'School Refusal.' pp.16-41.
- 19 佐藤正道 (1992a) 前掲書
佐藤正道 (1992b) 「1991年の世界の不登校研究の概観」 pp.91-110.
- 20 稲村博 (1994) 前掲書
- 21 Jung,C.G. (1961/1963) "*Memories, Dreams, Reflections.*" pp.42-53.
- 22 河合隼雄 (1978) 『ユングの生涯』 pp.38-42.
- 23 Jung,C.G. (1913/1961) *ibid.* pp.204-226.
- 24 Jung,C.G. (1913/1961) *ibid.* p.83.
- 25 河合隼雄 (1967a) 「ユング派の分析における技法と理論」 pp.484-488, p.506. なお、肉の渦の夢をみた学校恐怖症の中学2年生の事例は、河合 (1967b) 『ユング心理学入門』にも取り上げられている。pp.89-95.
河合隼雄 (1974) 「夢分析による学校恐怖症高校生の治療例」 pp.3-12.
- 26 Klein,M. (1923a) *ibid.* S.323-325. 「学校嫌い」は次のように書かれている。
Schulabneigung, Abneigung gegen Schule, Widerwillen gegen die Schule.
- 27 Klein,M. (1923a) *ibid.* 7歳に達しているかいないかのフリッツ (Fritz) はクラインの親類の子どもでもある。クラインは彼が5歳のときから面接をしており、彼女にとって精神分析的遊戯療法の出発点である。このフリッツの事例は、「The Development of a Child (1921).」 'Early Analysis (1923b).」にも取り上げられている。また13歳のフェリックス (Felix) の事例は、「Early Analysis.」 'A Contribution to the Psychogenesis of Tics (1925).」にも取り上げられている。これらの論文は、Klein (1975) *ibid.* に所収。Klein (1975) pp.1-53, pp.77-105, pp.106-127.
- 28 Klein,M. (1923a) *ibid.* S.344.
- 29 Treynor,J.V. (1929) 'Schoolsickness.' pp.451-453.
- 30 Broadwin,I.T. (1932) *ibid.* pp.253-259. 論文全体から要約したものであるが、後半部は p.255. からの引用である。
- 31 Hersov,L. (1990) *ibid.* pp.17-18.
- 32 Bowlby,J. (1979) "*The Making & Breaking of Affectional Bonds.*" p.136.
- 33 Bowlby,J. (1973) "*Attachment and Loss, Vol.2 Separation.*" p.213.
- 34 Bowlby,J. (1973) *ibid.* 登校拒否について論じているのは、「Chapter18 Anxious

- Attachment and the “Phobias” of Childhood. pp.258-291.’ p.262, pp.263-264, p.272, p.283. 登校拒否児の家族の相互関係の4つのパターンとして、彼は次のように述べている。〈パターンA：母親（まれに父親）が、愛着対象に関して慢性不安に悩んでおり、子どもを仲間として家にとどめておく。パターンB：子どもが、自分が学校に行っている間に母親の身の上にかか起こらないかと恐れる。パターンC：家から離れると自分に何か恐ろしいことが起こるのではないかと、子どもが思う。パターンD：母親が、学校にいる子どもの身の上にかか起こらないかと恐れる〉。
- なお、‘Chapter16 “Overdependency” and the Theory of Spoiling. pp.237-244.’をはじめ、他の章も参照のこと。
- 35 Bowlby,J. (1973) *ibid.* ‘Chapter21 Secure Attachment and the Growth of Self-reliance. pp.322-362.’ p.322, pp.360-361.
- 36 平井信義 (1968) 「思春期における登校拒否症」 pp.117-125.
平井信義 (1975) 『学校嫌い』
平井信義 (1978) 『登校拒否児』
上床和歌子・平井信義・他 (1977) 「登校拒否児の両親に対するCounseling」 pp.77-82.
池田晃子・平井信義・他 (1983) 「登校拒否における感情の安定と発達及び自主性の発達」 pp.27-32.
- 37 松尾恒子 (1976) 「“甘え” と “自立” の象徴的体験過程」 p.45.
- 38 Klein,E. (1945) ‘The Reluctance to Go to School.’ pp.263-279. 特に、pp.263-267, p.275,pp.278-279.を中心に、引用および要約をした。
- 39 高木隆郎・他 (1959) 前掲書 pp.403-409.
高木隆郎・他 (1965) 「学校恐怖症の典型像」 pp.151-152.
高木隆郎 (1984) 「登校拒否と現代社会」 pp.63-65.
- 40 佐藤修策 (1959) 前掲書 pp.1-15.
- 41 Rogers,C.R. (1942) “*Counseling and Psychotherapy.*”
Rogers,C.R. (1957) ‘The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change.’ pp.95-103.
- 42 Axline,V.M. (1947) “*Play Therapy.*”
- 43 鷺見たえ子・他 (1960) 前掲書 pp.27-56.
- 44 鎌幹八郎 (1962) 「学校恐怖症にかんする一考察(1)」 p.43.
鎌幹八郎 (1963) 「学校恐怖症の研究(Ⅰ)」 pp.221-235.
鎌 (1962) では、第3段階までで、第4段階はない。
- 45 高木隆郎 (1962) 「学校恐怖症の問題点」 pp.42-43.
- 46 鎌幹八郎 (1962) 前掲書 p.43.
鎌幹八郎 (1963) 前掲書 pp.221-235.
- 47 高木隆郎・他 (1965) 前掲書 pp.146-156.
- 48 平井信義 (1978) 前掲書
- 49 山本由子 (1964) 「いわゆる学校恐怖症の成因について」 pp.558-583.
- 50 村山正治 (1964) 「登校拒否中学生の心理療法」 pp.173-185.
- 51 Klein,E. (1945) *ibid.* p.265.
- 52 Rogers,C.R. (1958) ‘A Process Conception of Psychotherapy.’ p.143.
- 53 東山紘久・藪添隆一 (1992) 『システマティックアプローチによる学校カウンセリングの実践』 pp.128-161, pp.232-237.